

森久保がもりくぼに なった時

雫。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

森久保乃々がどうして「地味」という自己評価と矛盾してピアスをつけたりしているのか、どうして「もりくぼ」という一人称が混在するのか。その辺りを掘り下げた森久保乃々の前日譚です。

目次

そこに私はいなかった	1
自傷行為、そして変身	4
出会い	8
私のせいなら	11
森久保乃々の独白	17
自覚なき決意	20
対話	23
信念、私はここに	27
全てが初めての	32
私の作った結果	37
今日から私は	40

そこに私はいなかった

……優しくかったお母さんの振る舞いにあれ？　というのが見え始めたのは、そして

それに呼応して叔父さんや叔母さんが私に何かを求めるようになったのは、中学に入つてすぐにの頃だったと思います。いえ、ほんとうは、もつと早くに兆候があったのかもしれません。私がお母さんの苦しみに気づいてなかったただだけだったのかもかもしれません。……もつとも、私なんか気づいていても、何かできたとは思えませんけど……。

ある日、私がお家に帰つてくると、お母さんは一心不乱に、テレビの中のアイドルを見ていました。最初は、ただの気まぐれだと思いましたが……でも、次第におかしいと思うようになりました。

……お母さんは、古今東西のアイドルやバンドに関する本を買い集めるようになり、積み上げられたそれを見ては海より深い溜息をつく、ひたすらそれを反復するようになりました。時には、ご飯を作ったり洗濯をしたりすることすら忘れて。目も怖かったです。画面の向こう側に何を見てるのか、もう帰れない遠い彼方を見ているような光の無い深淵の瞳でした。

そしてある時、お母さんは私にそういう本を見ることを暗に強要するようになりまし

た。有無を言わさずに。そして繰り返すのです、乃々は私に似てきたねって。虚ろな目で私を見つめて頬を撫でながら。そして愚痴るのです、何度も同じ話を。夢を追うことが許されなかった昔話を、何度も。

……いえ、私を似ているというのは、実際にはもつと前からですけど。私を似てきたと初めて言った、その直後からお母さんは古いアイドルの本やビデオに没頭するようになりしました。

……芸能界に繋がりのある仕事をしてる叔父さんからアイドルの代役の仕事を頼まれたのは、それからほどなくしてからした。

……最初からわかっていました。それが単なる代役ではないことくらい、代役なら他にももつと向いてる子がいることくらい。でも、叔父さんたちは私じゃないとダメなのだと言って、頭を下げながら外堀を固めていききました。私が目立ちたくないことを、人見知りなことを逆用すれば、大人が私に嫌な仕事をするよう仕向けるのは、簡単なことでした。

わかっていきます、わかっていくんです。それでも、私は一度だけ聞きました。……何故なのと。

すると叔父さんたちは、少し黙った後、こう言いました。お母さんも喜ぶよって。

思った通りです。叔父さんたちは、おかしくなったお母さんの心を満たすために、私

を使っているんです。

そしてこうも言いました。森久保家のために頑張ってくださいと。

私は、「乃々」としてではなく、「森久保」家のパーツの一つとして、壊れた他のパーツの代わりになるためだけに働いているのでした。私自身は誰にも必要とされていません。お母さんの青春時代の現し身として、代わりとなり得る存在が必要なだけでした。

私にそれを拒否する権利はありません。親を盾にとつて、有無を言わずに私を親のための生贄にするのです。でも、私にはお母さんの代わりなんてできません。

私はただの「森久保」……ただでさえ自分を主張できなかった私は、家族のトラブルと思惑に翻弄され、お母さんの代わりに、なるべく自分を押し殺すことを強いられました。「ただの森久保」、そうなるには、自己主張の乏しかった当時の私ほど都合の良い子供はいなかったのでしょうか。

……なら、事前に予防線を張るしかないじゃないですか。私が失敗してお母さんが壊れても、私は言うべきことは言ったんだと。

無理……。むり……。むーりい……。

私はそうやって、お母さんの代わりを期待されながらも、それを壊していくのです。

自傷行為、そして変身

……私が嫌な仕事を、いや、お母さんの代わりをしなくてよくなるには、失望してもらうしかありません。森久保がお母さんではないことを知ってもらわないと、私が静かに暮らすことはできそうにありませんでした。何故なら、私の代役が予想以上に成功して、既に部屋から出られなくなっていたお母さんが少し元気になってから、叔父さんたちも熱に浮かされたようになったのです。もともと、叔父さんたちの熱の何割かはお金も舞い込んでくるからというのもあったようですが……。

でも、どうしたらいいのだろう。私が自分を改めて作り直そうと思ったのは初めてです。今までは目立ちたくなかった、流行りに乗ってまで面倒な騒ぎに身を投じたくなかった。私にとっての私らしきとは、静かに、平穩に、それをありのままに言うように過ごすことだったから。

手鏡を見ました。……サラサラのまつすぐな黒髪。形の良い耳。清楚で自然体の服装。まさに、昔のお母さんの写真に瓜二つです。これが、私が期待される理由です。

お母さんが私を過去の自分の代わりにしようとする理由で、叔父さんたちが、それに応えさせようとする理由です。同時に、お母さんが過去に戻ろうとするようになってし

まった元凶でもあります。

……逆に言えば、この昔のお母さんにそっくりな、正統派の清楚アイドルに相應しいと言われる（自覚はないですけど……）見た目さえなければ、森久保はただの地味で臆病で駄目な子。ただの駄目な子に戻れるんです。森久保家のみんなを裏切ることになっても、私は私に戻れるんです。そうなれば、この苦行からは解放されるのかも……。さらに言えば、もともからこの見た目でなければ、お母さんがおかしくなることもなかったかもしれないのです。

……私はこれまで誰かに必要とされたことなんてありません。私が必要とされたのは、お母さんに夢を見続けさせるための、今回が初めてなんです。私、乃々が必要とされているのではなく、お母さんの現し身としての森久保が必要とされてるだけ。……そこにほんとうの私はいません。

森久保はお母さんの失われた青春のための生贄。ならば、それに値するだけの価値がない子になってしまいうしかなないじゃないですか。

幸いにして、アイドル活動という苦行を始めてから、お小遣いだけは余裕があります。このお金さえあれば、森久保はお母さんの影から解放されるかもしれないわけです。

だから私は、散歩コースにしている人のいない森をたまたま、やるせない気持ちになつて普段より長く歩いて、隣町に抜けてしまった時、ある意味他にはないと思いまし

た。……親が連れて行ってくれなかった隣町には、私のお小遣いで十分に利用できる美容院やその他の施設があつから。

……今思えば、理由はそれだけでもなかったのかもしれない。もともと人に見られるのが苦手だった私が、いざ見られてみればそれはお母さんの代わり。ならいつそ、私をせめて見て欲しかったのかもかもしれません。

……抵抗はありました。入る時は、頼む時は魂が消し飛ぶかと思いましたが……それでも一歩を踏み出したのは、多分、森を抜けた先にある街だったからでしょうか。

そんなわけで私は、母から受け継いだ容貌や雰囲気捨てました。真逆になろうとした結果、ともすればギャルっぽいと言われるような見た目に……。でも、理由は後からいくらでもつけられます。嘘つくのは苦手なんですけど……。アイドル活動にはこの方が向いてるとか、流行りに乗らないといぢめられるとか、その程度の言い訳なら思いつきます。

髪色はブロンズに染め、パーマで後ろ髪を量をかき増した上でロールさせました。そしてピアスの穴も開けました、途中で緊張の余りに気絶しましたけど……。なんとか、やけになって最後までやりました。やれるところまでやりました。

鏡を見ます。……一体誰ですか、これは。それが第一の感想でした。間違いなくこの見た目では目立ちます。人の視線を集めるでしょう、人の視線はきつと光に飛び込む秋

刀魚のように刺さってきます。それは私にとっては苦行に他なりません。想像しただけで脳が沸騰しそうになる上に、それは私が後戻りのできないことをしてしまったという現実をあらゆる感覚に語りかけてきます。耐えきれなかった私は、その場で吐いてしまいました。

……でも、同時に何か殻を破れた気もしました。私ははつきり言つて、今までの自分のことが、容姿も含めて嫌いでした。もし、これが今までの自分との連続性に少しでも楔を打ち込むことになり得るなら、それも悪くないのかもしれないかもしれません。

……とにかくこうして私は、森久保はお母さんの影から乃々として独立できた……はずでした。

出合い

私が姿を変えてわかりやすく怒ってくれたのは、当時のプロダクションだけでした。期待はずれなんですけど……怒られるのは嫌ですが、この苦行から解放されるのが何よりの目的だったのに……。

どうして、叔父さんたちが私を芸能活動から解放してくれなかったのかはよくわかりません。もしかしたら見た目が多少変わってもお母さんの代わりにはなり得る、お母さんを満足させられると思ったのかもしれないし、単にこのまま働いた方がお金になると思ったからかもしれない。お母さんは、相変わらず部屋に籠って私のライブのビデオを見て自己投影するばかりなので、効いているのかもよくわかりません。

ともあれ、プロダクションの関係者は怒りました。困るよ森久保ちゃん、それじゃ森久保ちゃんの方向性と違うじゃないか、わかっているのかい。……そんなこと、私が一番よく分かっているんですけど。わかっているからこそ、こうしたんですけれど。

とにかく、プロダクションは私を追い出すか、強制的に元の姿に戻させるかの構えでした。そうになったら、叔父さんたちも流石に怒るだろうし、お母さんはどうなるかわかりません……。……やっぱ、私には全て荷が重すぎたんです。初めから無理だったん

ですけど。

どうして私は、元凶でもあるお母さんからもらった自信の持てない身体を傷つけてまで姿を変えたのに、大人たちの思惑に翻弄されなければならないのでしょうか。傷つけ方が足りないの……？ 思わず、カッターナイフを左手首に押し当ててしまえます。

……むーりいー……。私が臆病なことは依然として変わりません。跡になるような傷をつける前に、ちよつと血が滲んだところでカッターナイフを落としてしまえます。

そんな私のところに、一人の大人が寄つてきました。怖いんですけど！ どうして大人たちはみんな私なんかに関心させたがるんですか、期待するんですか。いちぢめですか。私なんて、ただの臆病で駄目な子で、もつと色々できる人がいるのに。この大人もきつと、私を、森久保をいぢめるつもりです。

その大人は森久保に名刺を差し出しました。他のプロダクションのプロデューサー。今のプロダクションとの契約が切れたら、是非うちに移籍して欲しいという流れの話だということとはすぐに察せました。その人は言いました。君なら、お母さんの代わりじゃなくて、ありのままでも輝けるよって。

初めは何のことかよくわかりませんでした。とはいえ、髪を染めてピアスの穴を開けたせいで元のプロダクションの仕事が打ち切られた手前、叔父さんたちは代わりが見つ

かったことは普通に喜んでましたし、これを機に平穏な生活に戻りたかった私ですけど、結局流されるまま、その事務所に移籍することになってしまいました。

……嫌々に決まってきました。どうせ、今までと同じようなことをするんだろう。自分を偽って、お母さんの夢の代わりを務めることに変わりはない。そう、思っていましたけど。

……でも、ある時から違和感を感じたのです。何かが違うって。

ここでは、お母さんの理想をトレースしなくても、叔父さんたちはともかくプロデューサーさんたちが怒ることは何故ありませんでした。何ででしょう、私はお母さんの夢をなざることだけの価値のためにここにいますけど……。

そして、この事務所にはあの人もいたのです。

渋谷凜さん。私がアイドルを嫌々ながらやって、その中で、百歩譲ってこのまま続けるとした場合、強いて言うなら、あんな風になりたいと思えた人。

私のせいなら

「乃々、緊張してる？」

机の下に隠れて膝を抱える私にそう問いかけてくるのは凜さん。アイドルとしての、唯一の憧れの人。

「……あうう……当たり前ですけど……私が凜さんと組むなんて、畏れ多いというか何というか……魂が浄化されて天に還るんですけど……どうせ還るなら森に還ります……」

この事務所に移籍してはや半年。未だ新しい環境に慣れず、唯一謎の安堵感を覚える空間を見つけたことくらいしか進歩の無かった森久保に打診されたのは、まさかの凜さんとユニットを組むことでした。

正直、ここの新しいプロデューサーさんが私に何を期待してるのかわかりません。どうして私なんかに、お母さんの代役をしてきただけの私にそんな大役を任さるんですよ
うか。

「まだ決定というわけでもないけど……乃々は私と組むのは嫌？」

「い、嫌なんてそんな……でも、責任が重過ぎるんですけど……。私なんかより、もっと

適任な人がいると思うんですけど……」

嫌どころかほんとうなら光栄なことのはずです。私が、強いて言うなら憧れてると言えるかもしれない凜さんと組めるなんて。でも、森久保なんかがそんな榮譽を受けていいはずはないです。私は隅っこで、日陰で最後まで全てをやり過ごすべきなのですから。

「そう、嫌ではないんだね。……最初は誰だつて緊張するよ。私だつて自信を持ってない時はあつた。でも、嫌じゃないなら乗り越えられると思うよ、乃々にはそれだけの可能性がある」

「む、むーりいー……。わ、私にできるはずないと思うんですけど……」

「じゃあ、乃々はどうしたいの？」

「……わ、私は……あうう……」

私は、それはやりたいに決まっていますけど。でも、それを口にすることは中々できません。森久保はただお母さんの心の均衡を保つための生贄として必要とされているだけに過ぎません。私そのものには何の価値もないし、もちろん私に何かを決める権利なんてきつと無いのです。

「……わ、私だつて、許されるなら……でも、絶対に凜さんに迷惑をかけてしまいますし……。……それに、誰も凜さんのステージに私が出ることなんて求めてないと思うんで

すけど……」

「……乃々がまだ早いと思うなら私もそれを尊重するよ。少なくとも私は待てる。……でも、もし一步を踏み出して何かを変えられるとしたら、それは乃々自身にしかできないことだと思う」

「わ、私自身に……」

私自身にしかできないのと。それが決断をして、一步を踏み出すことなのでしようか。確かに、普通ならそうかもしれない。でも、その一步の先にあるものを手にしていいか否か……その決定権を全て家族に握られていて、逆らえないのもまた私なのです。精一杯の反抗のつもりで見た目を変えても何も変わらなかったのですから……。

でも、踏み出すことそのものとか、過程とかで私にできることがあるなら……？

もし、そこだけなら私が私でいられるとしたら？

私は、受け入れるべきなの

でしょうか……？

「……凜さん、私は……！」

私が、自分でもよくわからないけど何かを言おうとしたその時です。プロデューサーさんが扉を開けて入ってきたのは。

凜と森久保のユニット結成計画にクレームが入って一時凍結となる。

そんな、ほんとうなら私は安心するはずなのに、何故かしよんぼりな気持ちになる言葉を携えて。

「私と乃々のユニット結成計画が凍結……? クレームって言ってたけど、どういうことなの、プロデューサー?」

凛さんがプロデューサーに詰め寄ります。プロデューサーさんは、戸惑う様子もなく淡々と、しかしどこか残念そうに答えました。

「……そんな。乃々の叔父さんが、私たちのユニット結成に妨害工作を?」

……本来なら、薄々予想できていたことです。こうなると思いたくなくて、現実を突きつけられるまで私はこの可能性から目をそらしていました。叔父さんがお母さんのために描いた図から少しでも森久保の活動方針が変われば、強硬手段を取ってでも修正するということくらい。

「……乃々、嫌なら言わなくてもいいけど、一体乃々の身に何があったの? こんな

強引な妨害が入るなんて、普通じゃ考えられない」

「……い、言うべきなんでしょうか……?」

正直、言いたいのか言いたくないのかもわかりません。もし下手なことを言ったら、家族に迷惑をかけてしまうことになりそうです……でも、今まで誰にも吐き出せずにいたことを言ったら少しは、何かが変わるのかもしれないし……私はどうするべきなので

すか……？

「……大切なのは、乃々自身がどう思うかだよ。それに口を挟める人は、ほんとうなら家族にだっていいはずなんだ」

「……わ、私が……」

むりですけど……考えがまとまらないんですけど……。私は一体どうしたら……。

「……何なら、ちよつと場所を変えようか」

徒歩で30分足らず。まさか事務所のそばにも、こんな落ち着ける森があったとは。

丸太のベンチやテーブルがある辺り、日によつては賑わっているのかもしれないが、平日のこの時間には誰もいません。実家のそばの森と同じです。確かに、ちよつとは落ち着きます。事務所では壁一つ隔てたところには事務員さんや他のアイドルもいましたし、全員で机の下に潜るわけにもいきませんでしたし……。

「……乃々、ここに来たのは乃々に心の整理をつけてもらうため。落ち着くでしょ、森。だから、語るも語らないも乃々次第。私とプロデューサーも、自分たちだけでこの問題をどうにかするくらい力の力はあるから。乃々は何も責任は負わなくていい。吐き出したい時に吐き出す、それだけだよ」

と、凜さん。私の気を楽しそうとして言っているだけなのか、ほんとうに自分たちで

処理する手立てがあるのか、人と目を合わせることもすらできない私には真意を読み取れません。

……でも、私が何も言わずに凧さんたちに任せてしまったら、それは私のせいで苦勞をかけたことになります。……私には何もできません。でも、吐き出すことを含めて何か言うだけで凧さんたちの負担が減るなら……言った方がいいのでしょうか？

「……いえ、大丈夫じゃないけど大丈夫です、言います。……言いますから……私が今後どうしたらいいのか教えて欲しいんですけど……」

……涙が出てきます。私は、森久保はここで過去や家族との問題をどこまで清算することになるのでしょうか。未知数です。未知なものには怖いのです。

「……うん、大丈夫。言えなくなったら、泣けばいい。ここなら誰もいないから……」
どうして、凧さんは私なんかに優しくしてくれるんでしょうか。

「……私の家は、お父さんの方が苗字を変えてたんですけど……今は別居していて……お母さんと弟と母子家庭なんですけど……ちよつと前に、お母さんが何かに取り憑かれたみたいになってきて……ある意味私のせいで……」

……私は、途切れ途切れに語り始めます。震える声で、でも、確かに凧さんとプロデューサーさんが聞いてくれていることを噛み締めながら。

森久保乃々の独白

……森久保の母方のお祖父ちゃんとお祖母ちゃんはとても怖い人で……私も帰省する度に情け無いかシヤキツとしろとか森久保家の恥だとか怒鳴られてたんですけど……それで、人が怖くなつて。

……だって、何を言つても怒るんです。言われた通りのことをしても、返事に気迫が無いとかやる気が感じられないとか言われるんですけど。だったら、最初から会わない方が、何も話さない方がいいじゃないですか……。

……それで、そのお祖父ちゃんたちは昔からお母さんにも厳しくしてたみたいで……昔ながらの良妻賢母を目指す以外は許さないって……。とにかく、お祖父ちゃんの頭の中では理想の家庭像が出来上がっていて、私もお母さんも、その線から少しでも外れることは許されなかったのです。

でも、お母さんは私くらいの歳の時、アイドルとか歌手とか役者とか、そういう世界に憧れてたらしいんです。……当然、お祖父ちゃんとお祖母ちゃんが許してくれるはずはありません。家政大学に行つて、良いお嬢さんを貰い模範的な主婦になる以外にお母さんの人生の選択肢はありませんでした。

だからお母さんはずっと、自分のほんとうの気持ちを押し殺して生きてきて、私を産んでからも、自分を偽って母の務めをしてきたのです。……夢を諦めて主婦として家族のために生きることが敷かれたレールだったのだとしたら、もしかしたら私を産んだのも、私を育てていたのも、それも全て望まないこと、お祖父ちゃんの上で転がされた結果に過ぎないのかもしれませんが。だったら、私はお母さんにとって、自分の生き方を否定した存在の残滓に過ぎないのかもしれませんが……。

……それもそのはずで、限界が近かったんです。お母さんの中で抑圧されたものはどんどん溜まって行って、殻を内側から引き裂いて……。それがついに破裂してしまったのは、私が在りし日のお母さんに本格的に似てきたかららしいのです。私を見るたびに、時間を越えた鏡を見ているような、そして過去の自分に責められているように思えます。どうしてアイドルにならなかったの、どうして私の夢を捨ててしまったの、どうして親に屈したの、って。

……そんなこと言われたら、まるで私がお母さんを責めているって言われてるみたいじゃないですか。

それからお母さんはおかしくなりました。家事もせず、私や弟との会話もほとんどできず、寝室に籠って、憧れていたアイドルのビデオを反復して見るように……。それだけが、自分の人生を持ってなかったお母さんにとって許された選択肢だったのです。お

祖父ちゃんが死んだ今、人生をやり直すにはもう遅いけど、思い通りにいかなかった現実から逃げて、過去の夢に浸る。その自由だけは手に入ったんです。だからお母さんは、初めて自由になって、他の全てを放り投げて虚ろな夢を見ようとしたんです。

……叔父さんたちは、これをお母さんが現実能耐えきれずに壊れたんだと判断しました。正確には、壊れる寸前で過去の夢を追体験して退行することで踏み留まっているのだと。そして、それができなくなつてほんとうに壊れてしまったら、どうすればいいかわからないと。

……叔父さんは、お母さんがこれ以上壊れることを阻止するには、お母さん本人すら自分の面影を見出すようになってきた私を、森久保をアイドルにさせることで、お母さんに果たせなかった夢を疑似体験させるしかないって思ったらしいのです。……嫌だというか重荷でというか……とにかく逃れたかったです。それで私は、少しでも昔のお母さんと違う見た目になつたら解放されなにかと……。

自覚なき決意

「……乃々……そんなことが……」

凜さんは、私の言葉が終わるまで、ただ聞いていました。わざとらしく頷いたり、同情したりするような仕草も見せず、ただじっと、言葉をそのままに。

「……はいいい……」

……そして私も言えました。言ったら、叔父さんたちに呪われるような気すらしましたが、言ったら案外、何か少しすっきりしないこともないような気もします。……もつとも、一時的なもので、むしろ言えることがわかった分楽になっただけのような気もしますが……。

……とはいえ、この肩の荷が降りた感じが何であれ、私が今まで抱え込んでいたものを吐き出したのが無意味ではないことは、凜さんの顔を見ていたら何となくわかる気がしてきました。

「でも、今の話なら乃々が活躍するのは乃々のお母さんにとつても叔父さんにとつても悪い話じゃなさそうだけど……私とのデュオを妨害した理由はわかる？」

「…………あう…………それは私にもわかりません…………。期待外れで申し訳ないんですけど…………」

「…………いや、乃々が悪いんじゃない。これだけのことがわかっただけでも前進にはなつたよ。そうでしょ、プロデューサー？」

プロデューサーさんも頷きます。となると、我々がまず取るべき手段としては、下手に出た風を装って叔父と面談して探りを入れてみるかそれとも…………。と思索しながら。

「…………いい、いえー！」

しかし、どういう訳か私は、森久保乃々は、突如として声を上げて立ち上がりました。私の身体を突き動かす感情が何なのか、そもそも理性なのか感情なのかもわからないですけど。

「…………その前に、私が一度聞いてきてみます。…………叔父さんよりも、お母さんに」

…………森久保は一体何を言っているのでしょうか。私が、どうして嫌だったアイドル活動なんかを続けるために、同じくずっと嫌だった今のお母さんとお話することを買って出るというのでしょうか。

…………私は一体、何を怖れて何に縋っているのか…………わかりません。考えれば考えるほど深淵に飲み込まれそうです。自分がどこから来てどこに行くのかみたいなことまで考えて怖くなってしまいます。

「……乃々、それでほんとうに大丈夫なの……？」
震えてるけど……」

「だ、大丈夫じゃないですけど……。……。でも、今は私のせいで凜さんたちは迷惑してるんですよ……。？」

私は今まで、駄目な子である自分が何かをしたらきつと人に苦勞をさせてしまう、そう思つて、何もできないでいました。でも、今回はどうなんでしょうか。

私がお母さんをして迷惑を緩和できるとしたら？
お母さんに話を聞く、そんな

ことができるのは、間違いなく私だけなわけで……。

「……。怖いに決まっています、決まっていますけど。お母さんとはもう半年以上話してないし、私の言葉がお母さんをさらに傷つけるかもしれないかもしれませんけど……。でも、私が今やらないと、何も変わらないのなら……。」

こうなったらやけです。やけの私が押し通ります。

……。やけになった森久保、それが「私」なのかも定かではありません。でも、もし私が私でなくなつて、そこにいる私ではない何者かが凜さんたちに迷惑をかけないようにしてくれるというなら……。私はその存在に全てくれてやりますけどオ！

対話

「……お母さん……私ですけど……」

暗い部屋の中に、古い音楽だけが反響しています。積み上げられたビデオや本に挟まれた布団の上に座ったお母さんが、テレビをじつと見つめています。来る者を阻むこの空間はさながらお母さんの聖域（サンクチュアリ）。

「……昨日のお皿、下げておきますけど……」

ここまでは、まだ普段からしている会話です。お母さんがこんな状況なので、私と弟、週一で来てくれる叔母さんが分担してやってる家事に関してだけは最低限の言葉を交わしています。

ですけど、それ以外の会話は一切、この半年間絶っています。もう昔話を聞かされるのも怖くなって、少しでもそれに繋がる会話からは逃げていたのです。

「……今日見てるのは、何年前のライブですか……?」

……久しぶりの会話は、状況に関連づけて、しかし他愛もなく。第一声はできても、その後が難しそうです。

森久保はそんなことを言いつつ、恐る恐るお母さんの顔を覗き込もうと……して、先

にテレビの画面に目が引き寄せられました。

「……凜さん……?」 いや、違う……?」

テレビの画面に映っていたのは、まさしく凜さんに似た雰囲気のアイドルでした。いえ、別に双子のようにそっくりなわけではなくて、冷静にちゃんと見れば別人だつてはつきりわかります。でも、一瞥した時のふんわりとした印象が何となく良く似ているのです。

「乃々ちゃん、この子好き?」

画面に釘付けになっていると、お母さんが顔をこちらに向けないままそう言います。

「ほら、お祖父ちゃん厳しいけど、私つて一回だけ目を盗んでオーディション行ったことあるじゃない?」

初耳なんですけど。

「この子ね、その時私と選考で競り合ったの。良い勝負だったわ。お祖父ちゃんに叩かれた痣さえ無ければ、私がこのステージにいたのよ」

お母さんは相変わらずこちらは見てくれません。

「でもね、3年後に覚醒剤で捕まっちゃったの。全て無駄になったの。私が、やつとの思いで受けたオーディションで勝ち取ったのに、私から奪った幸せなのに、もったいないわよね」

お母さんは、家での生活も、付き合う友達の選び方も、お祖父ちゃんに厳しく統制されていました。そんなお母さんが貴重な反抗を犯してやっと受けられた唯一のオーディション。その価値の高さは計り知れませんが。

このアイドルは、そんな価値のあるオーディションで勝利を掴んでおきながら自ら悪かな罪に手を染めて栄光を無に帰した。もしかしたらその場にいたのが自分かもしれないお母さんが、そのもつたいなさに対して感じる感情はなんでしょう。怒りか、悲しみか、呆れか……。

「……この人は、どんな人だったんですか？」

恐る恐る聞きます。しばらく話していないお母さん。「おかしくなった」と言われて久しいお母さん。果たして私の質問を理解して、答えてくれるのでしょうか。

「私ね、思わず泣いちゃったの。この子に負けた時。そしたらこの子、私を慰めようとするの。手を差し伸べようとするの、変に私の健闘を褒めようとするの。思わず、怒ってこの子を叩いちゃったわ。私と違って、機会にも自由にも恵まれてるくせに、アイドルになろうと思えばいつでもなれるくせに、私に何がわかるのって。……悪いことしたと思うわ。でも、あの時はほんとうに悔しかった、自分が惨めだった」

もともとしていた昔話の続きなのか、私の問いに答えているのかわからない文脈でした。でも、お母さんがこの子のことをどう思うのかは最低限わかります。そして、少な

くとも記憶などははっきりしていて、過去はちゃんと過去と認識していることも……。

「……今でも、あの子に何か思うところはあるんでしょうか……う？」

「……乃々ちゃん、凄いわね」

私の問いに、次はDVDを入れ替えることで応えるお母さん。これは、こんなにあっけなく再生をやめてしまうということは、もうあの子にそこまで固執していないととても良いのでしょうか。

「このステージの上から見える景色は綺麗でしょう？　私の景色なのよ……」

次のDVDは……森久保のライブ映像でした。今までは恥ずかしくて見ていなかったのですが、私が自分のライブ映像を見るのはこれが初めてです。

「星空のような観客席……森のざわめきみたいな声援……稲妻のようなサーチライト……全てが私の手の中に……」

お母さんはそこまで言ったところで、小さく笑いました。

「だったら良かったのに……乃々ちゃん」

それは自嘲。そして、語りかける相手はこの私であるとともに、画面の中で籠の中で足掻く小鳥のように惨めに舞う私。

そう、お母さんはちゃんと認識していました。自分自身と、画面の中の私と、そして今ここにいる私とを。

信念、私はここに

……状況を整理します。

お母さんは、相変わらず半年前と同じように、潰えた夢への感傷に浸りつつ現実逃避をしていました。そして、その思い出の中には凧さんに似た雰囲気の子がいました。多分、叔父さんが私と凧さんが組むのを妨害したのは、お母さんが自己投影している私が凧さんと並ぶことにより、トラウマが呼び覚まされてもつとおかしくなることを警戒してのことでしょう。

……しかし、それはお母さんが自分自信と私・森久保乃々、そしてトラウマのある人と凧さん。この四者二組を区別できない、全く境界を引くことができないだろうという前提もとの予測です。でも、私を含めた家族のほとんどは、誰もお母さんの病状の変化を見てこなかったのです。お母さんのほんとうの状態を知るのが、自分たちの対応の結果を知るのが怖くて、あの聖域にお母さんを閉じ込めたまま、なるべく距離を置いて、真実から目を背けてきました。

でも、ほんとうのお母さんと半年ぶりに話してみても、そうではないことがわかりました。決して普通の状態だとは、元に戻ったとは言えません。でも、確実に有していたの

です、自分と他者を、他者と他者を明確に線引きするだけの理性は。

それが元からだったのか、快方に向かっていることを意味しているのかはわかりません。少なくとも、半年前の段階ではもっと酷かったような気もしますが、これとてお母さんと関わらなかつた期間が長過ぎた故の悪い意味での思い出補正かもしれないです。もしかしたら、私がアイドル活動をしてるのを見て、少しだけ良くなった可能性もほんの少しだけあるのかもしれない。

とはいえ、今重要なのは、叔父さんの懸念が杞憂な可能性もあるということ。もちろん、確実にお母さんに影響を及ぼさないことを考えるなら、森久保と凜さんがユニットを組むのはよした方がいいでしょう。でも、今のお母さんは明らかに最低限人の区別ができる状態でした。だとすれば、むしろ何の変化も無く、今のままの私を見続けることは、お母さんのためになるのでしょうか。

……少なくとも、良い影響は与えないでしょう。確かに、私がお母さんと話して感じた主観的な印象が間違っていたなら、叔父さんの言う通りこのまま行くのが一番です。でも、もしお母さんが快方に向かっているのだとしたら、お母さんが見る私にも何らかの変化があつて初めて、何か殻を破れる可能性もあるかもしれないのです。

とはいえ、森久保もこの結論を自分の中で出して、苦しみました。私が自己を放棄すれば、全ては今まで通りになる。私が自分として動けば、全てが私に帰属し、そして何

かが壊れて何かが生まれる。こんなので、森久保には重過ぎるんですけど……。

でも、私には目を逸らすことは、それはそれで怖ろしく感じられました。目を逸らすこと、じゃあそこには壊れるものは無いのか、そもそも目を逸らすという選択が私にしたものなら、時計の針を止めたのも私ということになるのか……。正直、魂まで吐いてしまいそうです。

「……なるほど」

私の話を聞いて、凜さんとプロデューサーさんは唸ります。

「……やっぱり、聞く限りは乃々次第だね」

「そ、そうなのでしようか……」

「うん。その様子なら、乃々が私と組んだからと言って当然にお母さんに害があるとは言えないし、プラスになる可能性もある。でも、叔父さんはそうは思えないんですよ？」

だとしたらこれは、乃々自身と叔父さんの信念のぶつかり合いの次元の話だよ」

「……森久保の……私の……信念……」

いきなり信念なんて大それたことを言われたって、私にはそんなもの思いつきません。森久保は、ただひたすら家族に翻弄されて生きてきたのだから。

「難しく考えないでいいんだよ、乃々。今乃々がどうしたいのか、譲れないこと、変わりたいこと、それを紡ぎ出せば、乃々なりの信念が見えてくると思う」

「……………私の譲れないこと……………私が変わりたいこと……………」

……………譲れないこと。それが、今の私の変わらない気持ちの意味するとしたら、凜さんと組むこと……………あれ、なんでそんなことが真つ先に思い浮かぶの？

私はずい昨日まで、荷が重いつて逃げてたはずなのに。

……………私が変わりたいこと。だとすればそれは、私が私になることでしょいか。家族のための生贄から、少しでも、指一本でも脱却した森久保乃々という個人で何かを初めてすること……………。

でも、それは未知への旅。私が私になった時、今までに蓄積してきた分も、これからの分も、全ての痛みが私にのしかかるのです。

でも、それでも。

「……………そんなの……………そんなの、凜さんと一緒に組みたいに決まっていますけど……………！」

私はきつと凜さんの足を引っ張るかもしれません。でも、もし私なんかが自分の気持ちや言うことが許されるなら、私は叔父さんの意に反してでも、このユニットを組みたいんですけど……………！」

「……………そう。よく言えたね、乃々。それなら、あとは乃々の覚悟次第。私も全力でバックアップするよ」

優しく同意してくれる、凜さん。その笑顔は、いつか見たような気がする、いえ、ほ

んとうは見なかったお父さんとお母さんのその上位互換のようでした。もう見られないかもしれないものを、凜さんはさらに洗練して見せてくれました。

プロデューサーさんも力強く頷き、裏方は任せろ、森久保は森久保のしたいようにやれ、叔父に自分はここにいと見せてやれ、と言ってくれました。

「……………うう……………皆さん、そんなに頼もしくしないでください……………そんなに頼もしくされたら……………私も後戻りできなくなっちゃうんですけど……………」

全てが初めての

その後、私たちは忙しくなりました。

私は迷惑をかけないかの心配で蒸発しそうになりながらも、何とかして、叔父さんの意に反しただけの価値を得るべく、練習に打ち込みます。再び、お母さんとは話せなくなりました。

そして凛さんは私のペースに色々と合わせてくれて、プロデューサーさんは時には徹夜をしても、この一度頓挫しかけた企画を通らせようとしていました。二人がこうも頑張るようでは、今さら逃げられなじやないですか……もう、やるしかない。

そして一月後に迎えるミニライブ当日。

プロデューサーさんは、最後まで叔父さんサイドの勢力と競り合っていたようです。結果、中継を見るお母さんの側に叔母さんが待機して、少しでも変調があつたら、会場側で待機する叔父さんが動いて私たちのステージを中断し、合同ミニライブのスケジュールを繰り上げるよう根回しをする形になりました。これが、私たちのライブを認める条件です。

「……あう………ついに始まってしまった……。まさか………こんなことになるなんて」

このライブに臨むにあたっての緊張は、今までのものを超えています。こんな私が今までライブを乗り越えるという天変地異のようなことが今まであったのは、森久保があくまでもお母さんの思い出の代わりという立ち位置だからこそ、私が自分自身と本気でぶつかる必要が無かったからでした。

でも、今回は紛れもなく、私自身の活躍する場なのです。全てが、責任も後悔も懺悔も何もかもが私に帰するのです。……既に失敗する自分ばかりが脳裏によぎって、このライブ当日を迎えてから三度は吐きました。未来の自分を思い描くだけで、自分の全てが嫌になって。……こんなの、無理に決まっていますけど……。

でも、もし無理じゃないとしたら……？

「……乃々が選んだ道に間違いは無い、そう私は信じるよ。ううん、信じていたからこそ私もプロデューサーもついてくれた。だから、あとは成功させるためのピースは一つだけ。乃々自身が、自分の道を信じること」

「……うう……でも私、今まで自分のことを信じたことなんて無くて……ずっと家族の思惑に振り回されてきましたし……その流れに刃向かうこともできなかつた弱くて駄目な子で……」

「そんなに難しく考えないで、乃々。少なくとも、乃々が自分の流れを初めてとは言え作ることができた、だから今ここに立ってるんでしょ？」

凜さんはそう言って、私の手を握ってくださいます。誰かに手を柔らかく、しかし頼もしく握ってもらえるなんていつぶりでしょうか。

「……………うう……………信じるとかって言っても、なんていうか、自己暗示みたいなことしかできないんですけど……………」

「それで十分だよ。ある程度のところまで乗り越えられれば、また変わるから」

私には、凜さんの超然とした構えに込められた意味を理解することはできないでしょう。でも、自己暗示で楽になれるなら、それしかありません。自己暗示で、お母さんと向き合った時のやけになった、私じゃない私を召喚しよう……………。

ステージに上がります。

視線、声援、今回ばかりは全てが私自身に向けられています。今までのように、私の後ろにいる存在に受け流すことは許されないので。

まるで、狩の成果として吊るし上げられて見せ物にされた森の動物のような気分……………。

でも、同時に他の名状しがたい気持ちも感じます。自分で選択してここにいる私、その私自身に向けられる期待。初めての経験です。これは確かに「痛い」経験のほず。恥ずかしさ倍増で、責任重大で、逃げ場も無い、私には痛すぎる舞台に他なりません。なのに、痛みに晒される表面部を補完するかのようには、私の芯には熱く、でも痛くない何

かがあるのです。そして、その鼓動は確かに痛みにも連動していて……。

……自分自身で何かを貫くというのは、かくも痛く苦しく、でも何か心地良いものを同調して感じるという、麻薬的なものなのでしょう。正直、森久保には……私には、何度も耐えられるものではないです。

ですけど、私はもう後戻りできない舞台に立つてしまっています。逃げられないなら、例えば私がダメで、本来ならこんな負担ではパンクするような子だとしても……今この瞬間だけは、この不条理で甘美な刺激に甘んじてもいいのでしょうか。

もし、この声援が、隣にいる凛さんの頑張りがそれを肯定する答えなのだとしたら……。

……ライブは、いつの間にか終わっていました。私はただ、痛みを伴う充足感を感じながら、凛さんの足を引っ張らないように必死にやっただけです。でも、いつもより早く感じられました。そして、いつもより早く過ぎたにもかかわらず、私はその中に自身存在を確かに感じた気がしました……。

その痛みも伴う確かな自分の存在感、自信がないながらもこの手に感じられる虚無の対極。そんなものを噛み締められるのは初めての体験。こんな何も無い私がいままを通して、虚無以外のものを得られるとは知りませんでした。

……でも、慣れない私にはそれが正のものであれ負のものであれ、どのみち負荷が大き過ぎるのでしょうか。ライブが終わった後、私の中に燻るものは私の全身の神経系を引つ張り合うように圧迫します。

……あれ？

……だんだん意識が……。

「も、森久保オ！」

足の感覚が無くなり、視界が暗転。しかし、私の脳天が床に当たって割れることはありませんでした。力強く、頼もしい存在にギリギリのところまで支えられた、私の記憶はそこで途切れます。

やっぱり、もりくぼはこの痛みに耐えられなかつたのです。ですけど、この痛みを受け入れることは……少なくとも今回はできたみたいです。

私の作った結果

お医者さんが下した客観的な結論は、貧血。

もつとも、私は別に持病として貧血気味だったわけではありませんけど。……精神的な負担で何故か貧血になる、私はたまにあるんですけど、他の人はどうなんでしょう。怒られてシヨックを受けた時とか、取り返しのつかない失敗に気づいた時とかに冷や汗が出て目が開けられなくなって全身の力も抜けて……。

ともあれ、凜さんとプロデューサーさんが言うには、ライブは無事に成功したようです。私が倒れたのは、全てが終わって退場する時のこと。凜さんと私のユニットは好評で、続投を望む声も多かったそうです。そんな漠然とした業績を言われても何だか実感が湧きませんでしたが、凜さんが組めてよかったと笑顔で言ってくれど、何となくわかりました。……同時に、自分なんかがこんな期待の的になっていいのかとの罪悪感もありましたけど。

……さて、ほんとうに懸念すべきは私のお母さんです。お母さんを心配するあまり叔父さんは私の独自の路線には反対し、そもそもお母さんがおかしくなったのが、私がこんなことに巻き込まれた原因でもありました。しかし、考えてみればそれが無ければこ

の痛みに満ちた達成感を知る機会も無く、凜さんと知り合うことも無かったのです。ほんとうに、全体としてらどう捉えたら良いのか私にはわかりません……。

……叔父さんの心配は杞憂だったようで、私のライブを見たお母さんの状態が悪化することはありませんでした。むしろ、私を見て、一筋の涙を静かに流したとのことでした。自分にも理由がわからない涙を。そして、その直後少しの間だけ、叔母さんと言葉を交わせたらしいです。

……多分ですけど、もしお母さんが私に自己投影することで精神の均衡を保っていたのだとしたら、実は叔父さんたちも、そしてお母さん自身も、一番「効く」のが何なのかを勘違いしていたのではないのでしょうか。

これは、プロデューサーさんや凛さんの意見も交えての推測ですけど……お母さんが自分の青春から真に奪われたのは、単に芸能人になりたいという夢だけではなく、それに必要な自由、或いはその自由を求められる信念であり、そこに確立された自己なのではなかったのかと。

だから、私わがわがままを通して、自分のやりたいようにやり切り、その痛みも快感も一人で抱え込んだ姿こそが、自分の作った世界にいる姿こそが、単に言われてアイドルをやっている、つまり過去のお母さんと同じように縛られている私の姿よりも理想的なものに見えたのだとしたら……。私が凛さんとペアを組んだのも、むしろ自分が過去の

トラウマを、敗北を克服しているように見えたのだとしたら……。

……お母さんは今、病院にいます。今まで世間体を気にして部屋に軟禁状態にすることを決めていた叔父さんも、今回の件で自分の推測や方針が外れることを自覚して、重い腰を上げたようです。

……魂が消し飛びかけてまだ回復していない私にはまだ、お母さんに再び会いに行く勇気はありません。でも、もし森久保が、叔父さんの干渉がめつきり減った私が、今後独自に何かをしてお母さんが良くなることがあるとしたら……その時は、ちよつとだけ様子を見に行ってもいいかも、と思いますけど……。

今日から私は

「乃々、復帰おめでとう。……こないだは色々あつたから気に病むことは無いよ。私以外にも、今後乃々と組む人はいるみたいだけど、私はいつでも後ろから支えるから」

倒れた後に療養休暇を貰った私が久しぶりに事務所に出向くと、凜さんはそういて、休んで迷惑をかけたはずの私に頼もしく微笑みかけてくれます。

「うう……り、凜さんがそう言うってくれるのは嬉しいんですけど……。私なんて、もりくぼなんて、壁をひとつたまたま転びながら超えたところで、ただのもりくぼに過ぎないんですけど……そんなにもりくぼに期待されても……」

「でも、乃々はここにいる。私は乃々に重荷がのしかかったら、それを一緒に背負うつもり。決して無責任に期待だけするつもりはないよ」

「あう……もりくぼ、また迷惑かけてしまうかもしれないですが……。それでも、もりくぼを見捨てないでくれるんですか……？」

「うん、当然。……ところで、乃々って前から、自分のことを苗字で呼ぶことあるなって思ってたけど、今日はなんか雰囲気が違うような……」

「…………えっ!?」

久々の出社の緊張も相まって、明確な回答を事前準備してこなかった問いを前にびっくりとしてしまったもりくぼは、ノートを落としてしまいました。

「…………乃々、何か落としたよ。…………日記?」

「ぴいつ!?」 み、見ないで下さい……」

しかし既に時遅し。ポエムを交えた日記ノートは全開の状態で落ちていたため、見開きが丸々凜さんの網膜に焼き付いてしまいます。

ポエム入りの日記が公開なんて無理なんですけど!

確かにもりくぼはポエ

ムとか趣味ですけど、別に人に見せるほど得意というわけでもないし、もりくぼなんかのポエム、見て心地良いと思えるはずありません。笑うか不快になるかです。

「ご、ごめん……。あれ、この日記、少し前から一人称が変わってる……。……なんか修正した跡もあるけど」

…………見られてしまいました。ポエム日記を人に見られるのは初めてですけど……。でも、一人称に関心が行ってくれたお陰で、肝心のポエムを見られる前に回収できたのは不幸中の幸いでしょうか。とりあえず、安心して良いのやら……。ともあれ、ポエムに踏み込まれるよりは、一人称の話の方が良いです。だって、それは私が私になるためにきった舵なのだから。

そう、この日記の私の自分自身を呼ぶ表記は、それまでの「森久保」と「私」の表記から、ひらがなの「もりくぼ」に変わっていたのです。多分、無意識に「Morikubo」と喋る時の発音も、言われてみれば変化していたのかも……。

「……私、これまではただの『森久保』だったんです。家族の中でも何もできずに流された挙句、私とお母さんの間の区別まで取り払われて……。だから、私は自分のことを、森久保から独立した個人だと思えなかつたんです」

ほんとうは、辛かった。当時はむしろそれが逃げにも機能していたけど、今ならわかります。「私」がいないことの、痛みとは違う空虚さが。

「でも、こないだのライブで初めて、私は私として存在して良いんだと言われた気がしたんです。だから、これまで自分を納得ささるために自称してきた『森久保』呼びを変えて、『乃々』って自分を主張できたらどうなるんだろうって思つたんですけど……」

「……恥ずかしくて、罪悪感も感じちゃつたんだね。あまりに『森久保』だけだった時期が、それに甘んじた期間が長かつたから」

「はい……情け無さすぎて森久保に戻りたいくらいです……。でも、少し柔らかく、形を粘土みたいに変えられそうな感じに『もりくぼ』って言うのなら、何とか……」

私はいつか、ただの「乃々」になりたい。でも、私なんかにいきなりのそれは無理でした。でも、だからってワンクッションを置くなんて……ほんとうに駄目な子です。

「なるほど、過渡期ってことか。……私は、それでもいいと思うよ。人は、自分を見つけてるのは時間がかかるもの、そしてこの世の中が与えてくれる時間は、ひとが自分自身と満足に見つめ合うにはあまりに少なくなるから。……だから、乃々が過渡期に移行できたことは、それだけでも大きな一歩だと思う」

「凜さん……」

凜さんは、もりくぼに手を差し伸べます。

「乃々がほんとうに『乃々』になれるまで。それまで、私は付き合うよ。乃々が自分を忘れないように、『乃々』って呼びながら」

涙が溢れてきます。ただでさえ、森久保だった時には必要とされなかった私。私が、もりくぼが、乃々が必要とされ、認めて貰える場所が、ようやく見つかったんだ。痛みも恥も伴う怖い世界。ですけど、もりくぼは、乃々はここにおいていいのです。

また逃げてしまうかもしれない。迷惑もかけるかもしれない。無理なことがいっぱいあるかもしれない。でも、私が私であることは許されるんです。

だったら、私はようやく安心して、この過渡期に甘んじられます。

だから今日から私は、もりくぼは、もりくぼです。